

ダイジェスト版

# 中高の 英語指導に関する 実態調査 2015

## CONTENTS

調査概要・調査の枠組み	2
基本属性	3
1. 指導の実態	4
2. 指導に関する教員の意識	9
3. 英語教育改革について	16
4. 英語教育改革に関する意見(校長調査)	18
[英語教員に対する聞き取り調査](2014) から見えてきたこと	19
調査結果からの考察	20

ベネッセ教育総合研究所では、2015年8～9月に中高の英語教員を対象とした「中高の英語指導に関する実態調査 2015」を実施しました。本調査は、英語指導の実態や英語教員の意識を捉えることにより、英語教育の課題を明らかにすることを目的としています。

### 【調査結果からの考察】

#### ◆特別インタビュー

根岸 雅史 (東京外国語大学大学院)

「調査結果から読み取れる課題とこれからの英語指導のあり方」

#### ◆調査企画・分析メンバーによる調査結果の考察とメッセージ

酒井 英樹 (信州大学)

高木亜希子 (青山学院大学)

重松 靖 (国分寺市立第二中学校)

工藤 洋路 (玉川大学)

## 調査概要

### ●調査テーマ

中高の英語指導の実態と教員の意識

### ●調査方法

郵送法による質問紙調査

### ●調査時期

2015年8～9月

### ●調査対象

全国の中学校・高校の校長および英語教員

#### 【中学校】

校長 717名（配布数2,639通、回収率27.2%）

英語教員 1,801名（配布数7,917通、回収率22.7%）

#### 【高校】

校長 435名（配布数1,059通、回収率41.1%）

英語教員 2,134名（配布数6,354通、回収率33.6%）

#### \*抽出方法

全国の中学校・高校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率で無作為に学校を抽出。校長調査は、中学校・高校ともに校長に回答を依頼した。

教員調査は、中学校は各学校最大3名の英語教員に回答を依頼。年齢、性別、担当学年などがなるべく偏らないように配慮していただいた。高校は各学校最大6名のコミュニケーション英語（基礎・Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのいずれか）を担当している英語教員に回答を依頼。年齢、性別、担当学年などがなるべく偏らないように配慮していただいた。

### ●調査項目

#### 【校長調査】

英語教育における他校との連携／英語関連の行事／校内研修／英語教育改革についての意見、など

#### 【教員調査】

授業の内容／英語使用割合／授業における教員の英語使用場面／宿題／授業の振り返り／将来の英語の必要性と生徒の英語使用／指導する際に重要なことと実行すること・実行していること／受けたい研修／自己研鑽／小中（中高）連携／生徒のつまずき／悩み／授業で大切にしていること／指導に影響を与えていること／「CAN-DOリスト」の形の学習到達目標の設定について／「授業を英語で行うことを基本とする」ことについて／大学入試の4技能測定について、など

\*図表で使用している百分率（%）は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

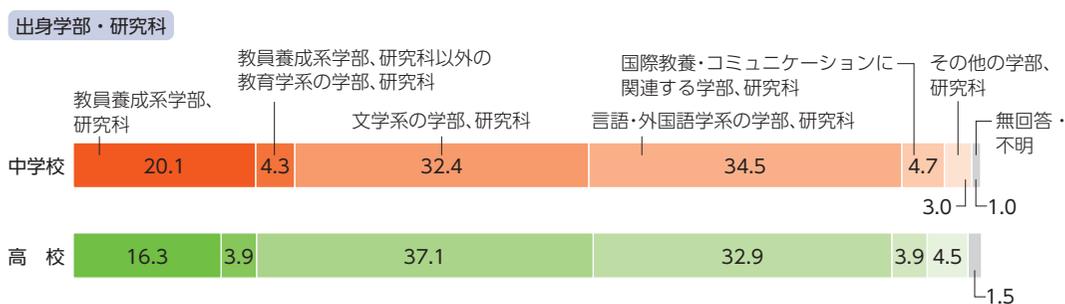
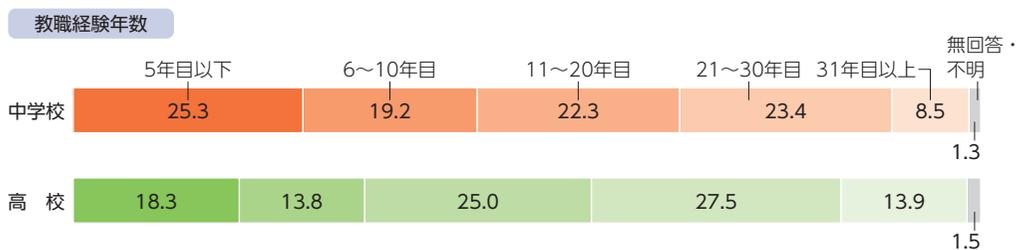
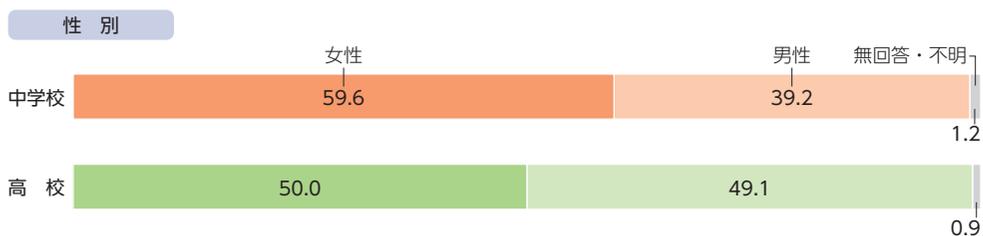
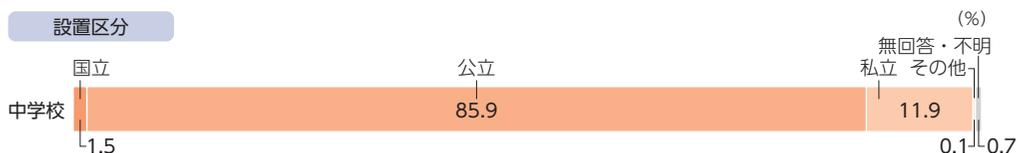
## 調査の枠組み

●本調査の設計は、これまで実施した学習面と指導面の両面を捉える量的研究と質的研究を踏まえ行っている。



※「中学生に対する聞き取り調査」「中高生の英語学習に関する実態調査2014」の結果は、「中高生の英語学習に関する実態調査2014」速報版をご参照ください。WEBサイトで閲覧できます。

# 基本属性



\*基本属性は教員の回答を示している。

\*「教職経験年数」は、「11～20年目」は「11～15年目」「16～20年目」の合計。「21～30年目」は「21～25年目」「26～30年目」の合計。「31年目以上」は「31～35年目」「36年目以上」の合計。

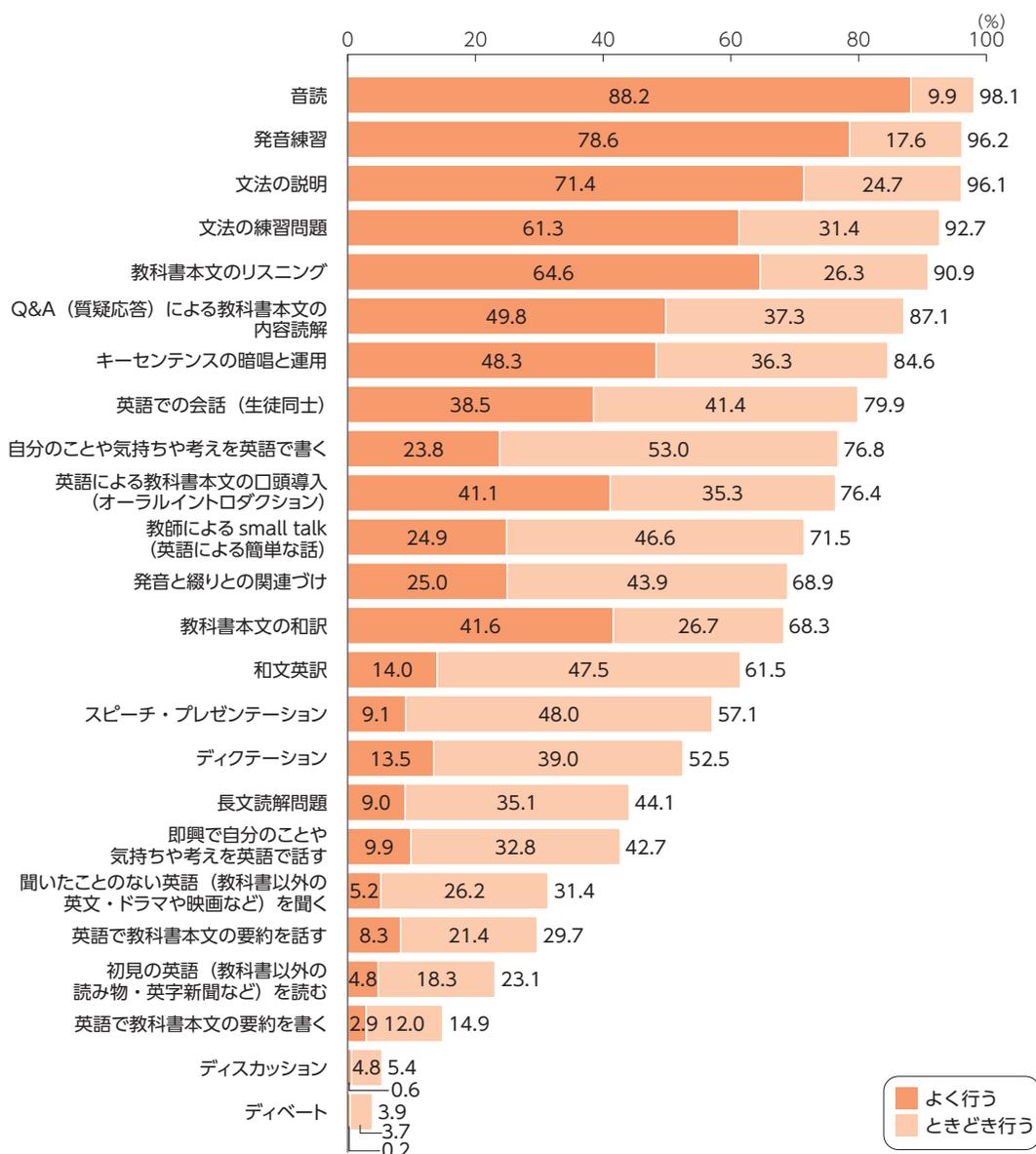
# 1. 指導の実態

中学校の授業では、音声・文法指導や「聞く」「読む」活動が中心。「話す」「書く」活動も多少行っている。

中学校の指導方法・活動内容は、「音読」「発音練習」「文法の説明」「教科書本文のリスニング」などが9割（「よく行う」+「ときどき行う」の％、以下同）を超え、音声を中心とした指導や文法指導が多い。高校に比べ、「自分のことや気持ちや考えを英語で書く」「英語での会話（生徒同士）」「スピーチ・プレゼンテーション」は特に多い。

Q 授業において、次のようなことをどのくらい行いますか。

図1-1 指導方法・活動内容（中学校）



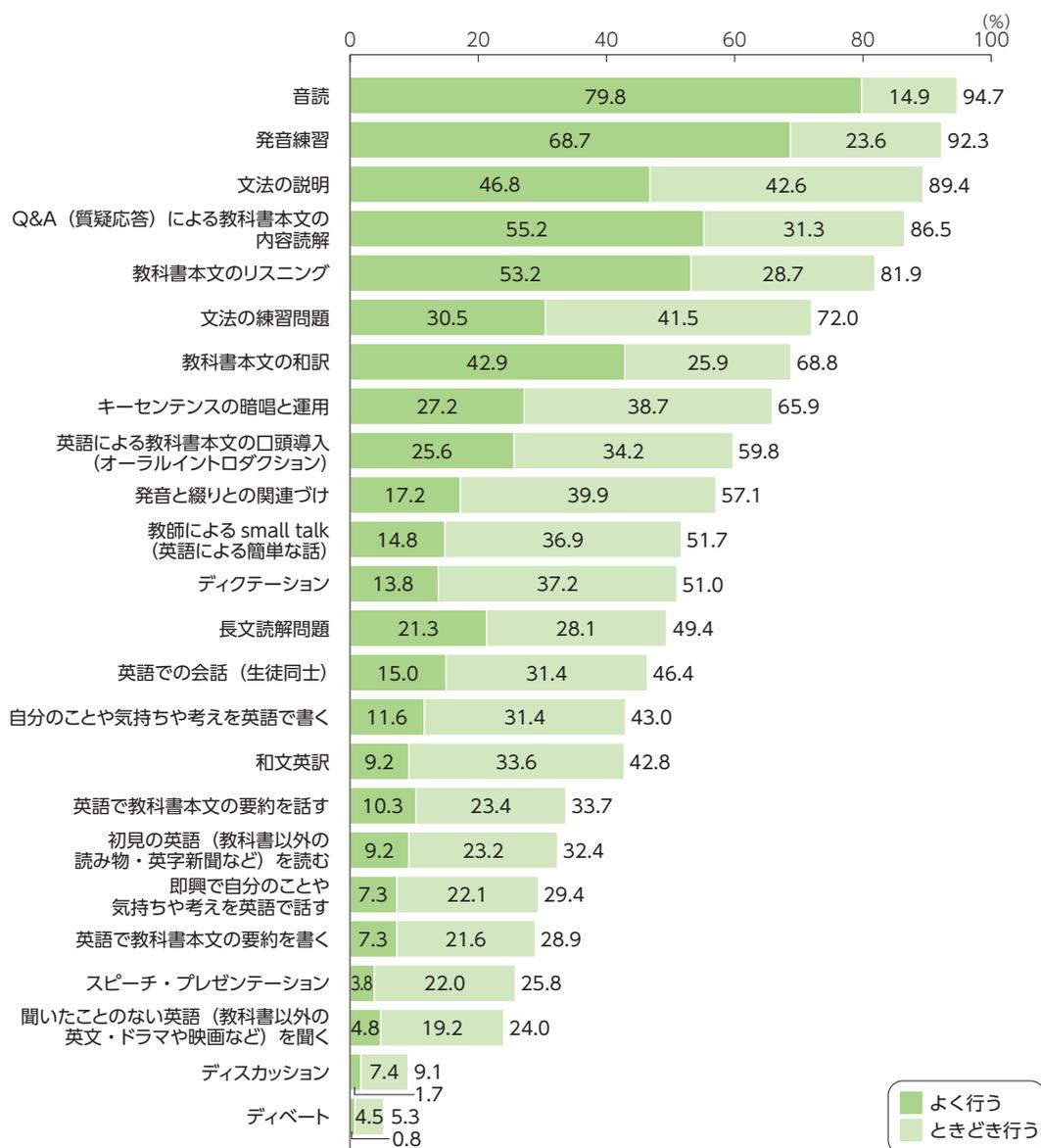
\*各横棒の外側にある数値は「よく行う」+「ときどき行う」の％。

## 高校の授業でも、音声・文法指導が中心。「話す」「書く」活動が少ない。

高校の指導方法・活動内容は、中学校と同様に「音読」「発音練習」「文法の説明」が多い。それに対して、「自分のことや気持ちや考えを英語で書く」「英語で教科書本文の要約を話す」「即興で自分のことや気持ちや考えを英語で話す」「英語で教科書本文の要約を書く」などの「話す」「書く」活動の実施率は低く、特に「ディスカッション」「ディベート」は1割未満と低い。

**Q** 授業において、次のようなことをどのくらい行いますか。

図1-2 指導方法・活動内容(高校)



\*各横棒の外側にある数値は「よく行う」+「ときどき行う」の%。

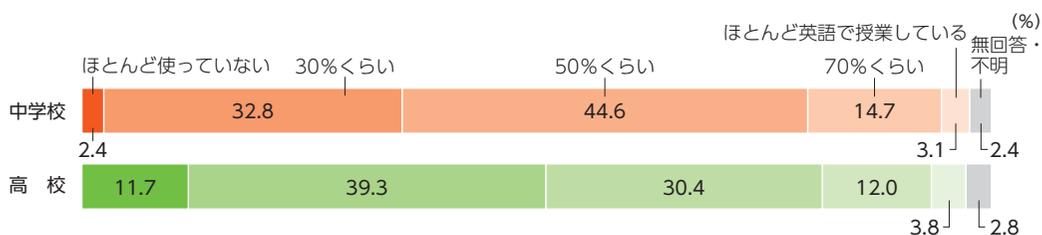
# 1. 指導の実態

## 授業で英語を半分以上使っている割合は、中学校6割、高校5割弱。

教員が英語を半分以上使って授業を進めている割合は、中学校が6割、高校が5割弱である。実際の英語の使用場面は、「生徒への指示」「褒め・励まし」「生徒とのQ&A」などが7割を超えている。英語使用場面のうち、上位4つは中高の差が大きく、中学校の方が多い。

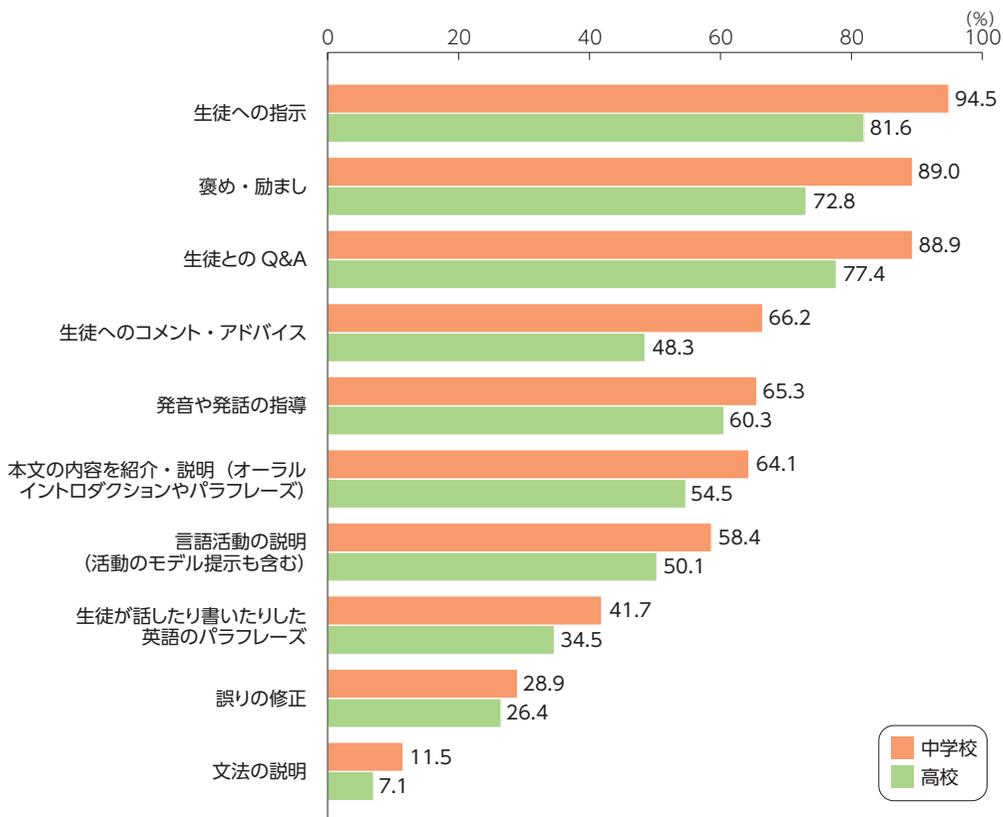
Q ふだんの授業において、あなたが英語をご使用になる割合はどのくらいですか。

図1-3 授業での英語の使用割合



Q ふだんの授業において、次のような場面で英語を使いますか。

図1-4 授業での英語使用場面



\*「よく使う」+「まあ使う」の%。

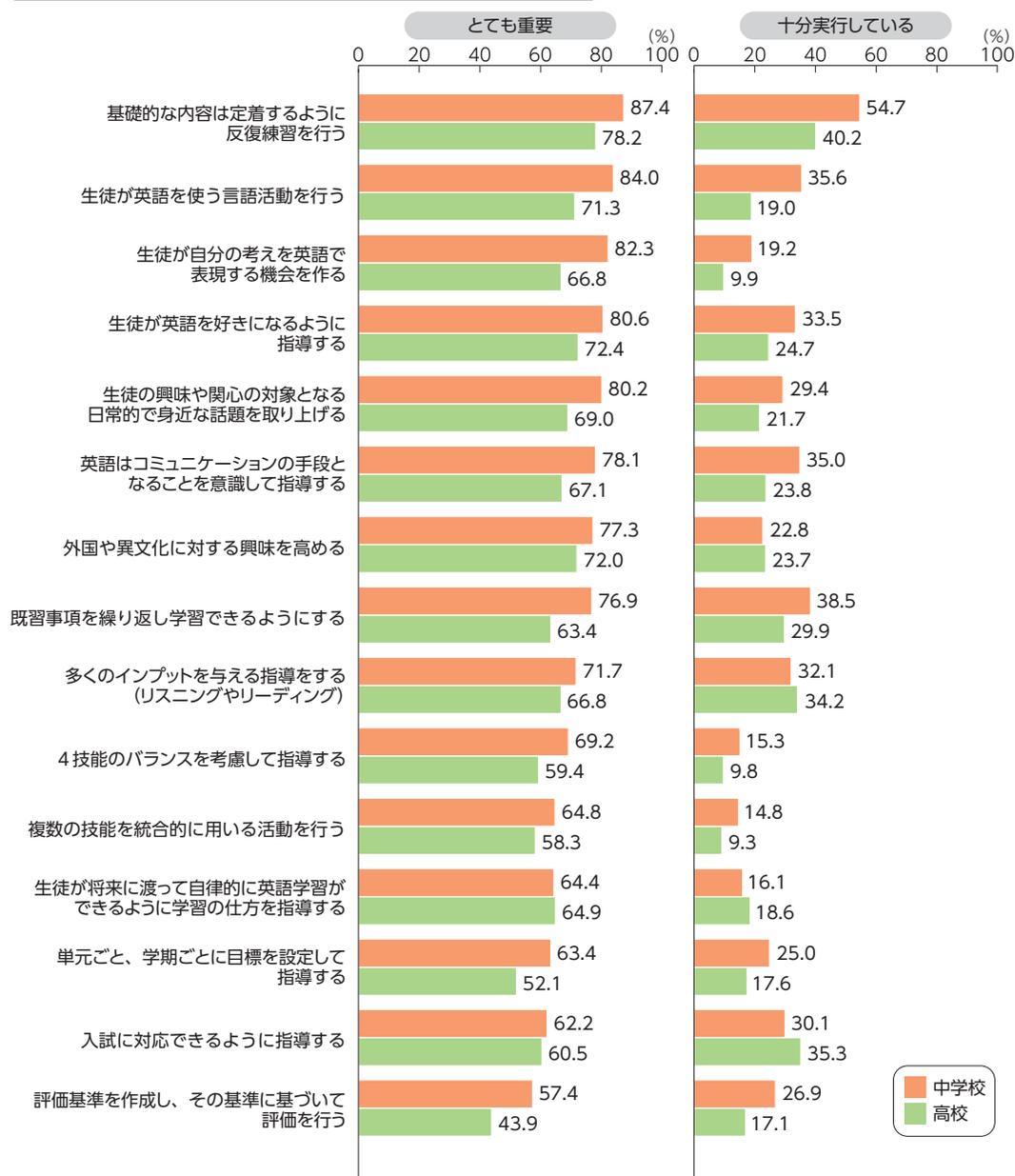
## 「生徒が自分の考えを英語で表現する機会を作る」ことは、重要だと感じつつも、実行している教員は少ない。

指導において、重要だと思うこととその実行についてのギャップ（「とても重要」－「十分実行している」）をみた。「生徒が自分の考えを英語で表現する機会を作る」「4技能のバランスを考慮して指導する」ことなどで大きなギャップがあった。重要だと思いつつも十分に実行できていないことがわかる。



英語を指導する際、次のことはどれくらい重要だと思いますか。また、それぞれについてあなた自身はどの程度実行していますか。

図1-5 とても重要だと思うこと／十分実行していること



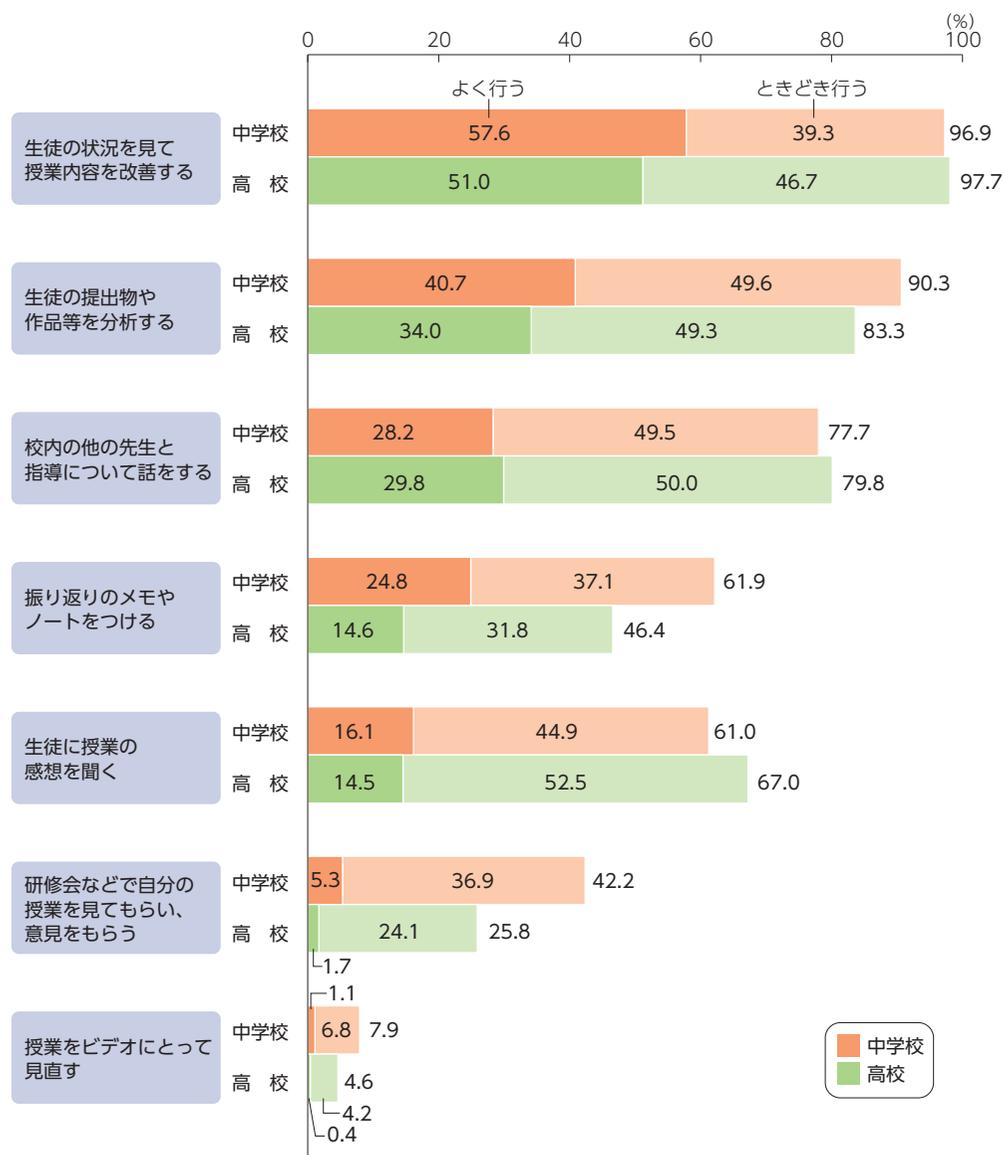
# 1. 指導の実態

## 授業の振り返りでは、ほとんどの教員が「生徒の状況を見て授業内容を改善する」と回答。

授業の振り返りについて、ほとんどの教員が「生徒の状況を見て授業内容を改善する」と回答している。「振り返りのメモやノートをつける」「研修会などで自分の授業を見てもらい、意見をもらう」は中学校で特に高い。

**Q** 次のような授業の振り返りをどれくらいしていますか。

図1-6 授業の振り返り



\*各横棒の外側にある数値は「よく行う」+「ときどき行う」の%。

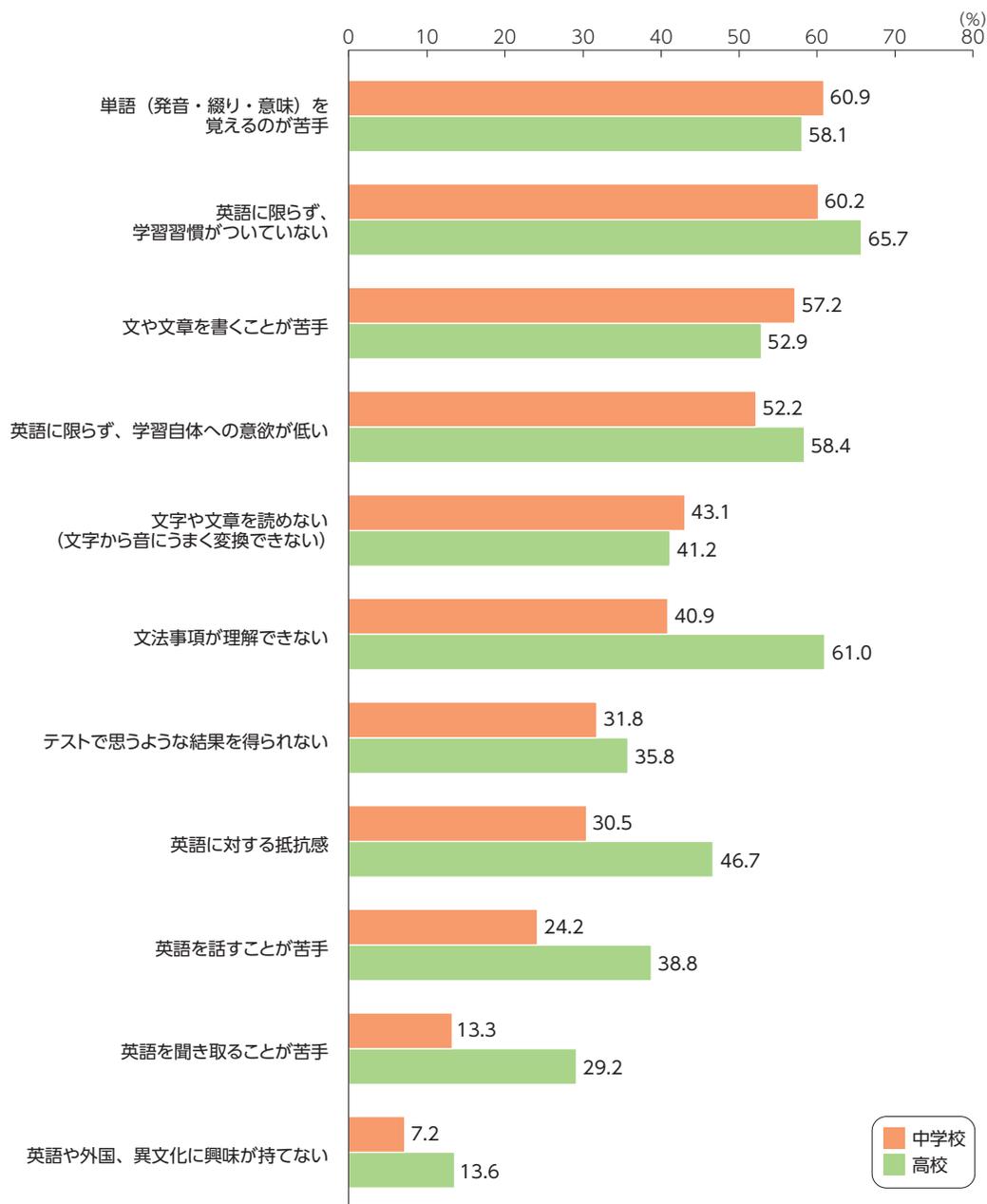
## 2. 指導に関する教員の意識

生徒のつまずきの原因は、「単語を覚えるのが苦手」「学習習慣がついていない」が上位。

英語に対する苦手意識やつまずきを感じている生徒はどのようなことが原因だと思うかをたずねたところ、中学校では「単語を覚えるのが苦手」「学習習慣がついていない」が、高校では、「学習習慣がついていない」「文法事項が理解できない」がそれぞれ上位だった。

**Q** 英語に対して苦手意識やつまずきを感じている生徒は、どのようなことが原因だと思いますか。

図2-1 生徒のつまずき



\*「とてもあてはまる」の%。

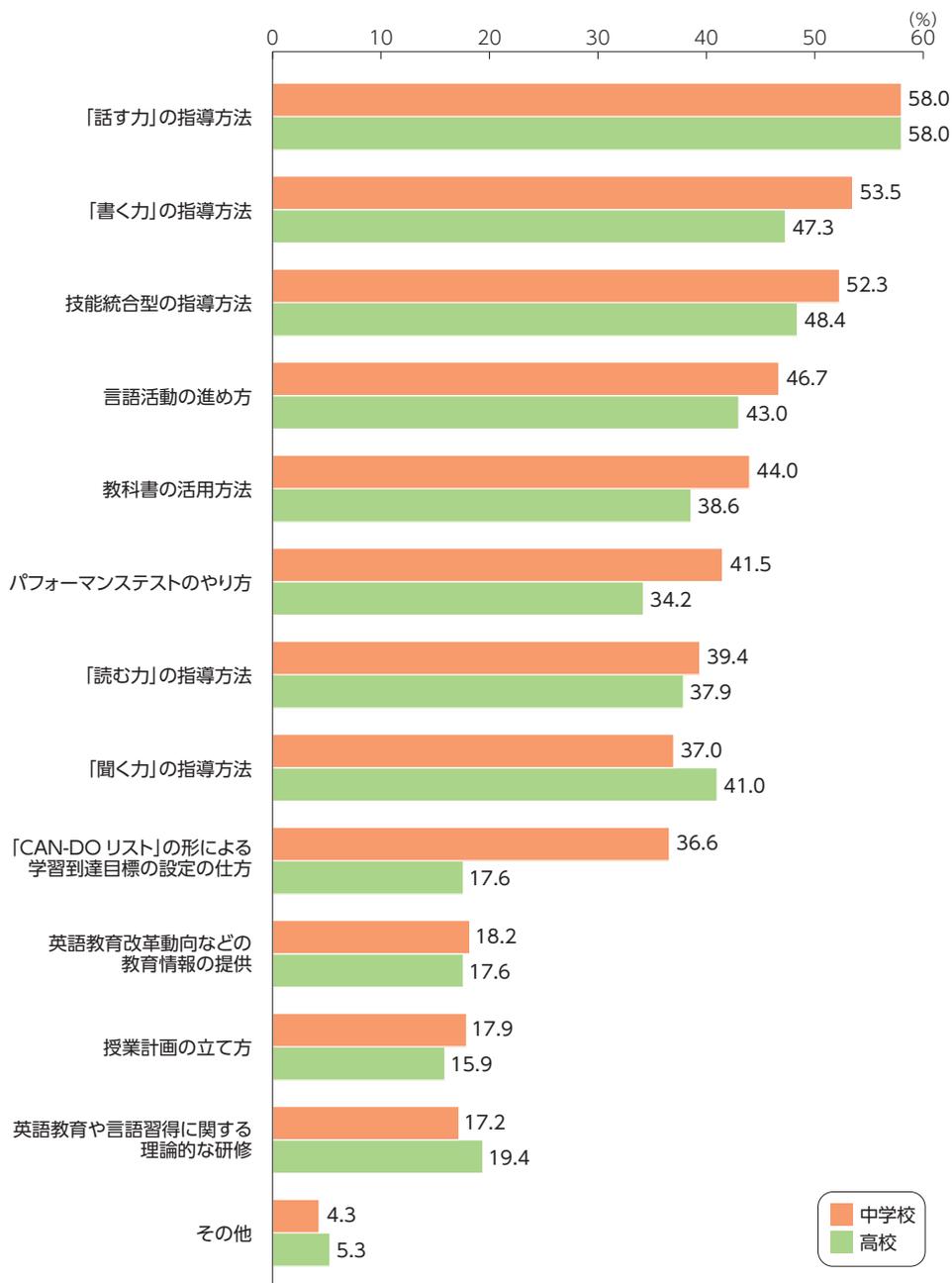
## 2. 指導に関する教員の意識

### 受ける研修は「『話す力』の指導方法」がもっとも高い。

中高ともに「話す力」「書く力」「技能統合型」の指導方法の研修を受けたいとの回答が多い。中高で比較すると、中学校では「『CAN-DO リスト』の形による学習到達目標の設定の仕方」が高校よりも約20ポイント高い。

Q どのような内容の研修を受けたいと思いますか。

図2-2 受ける研修



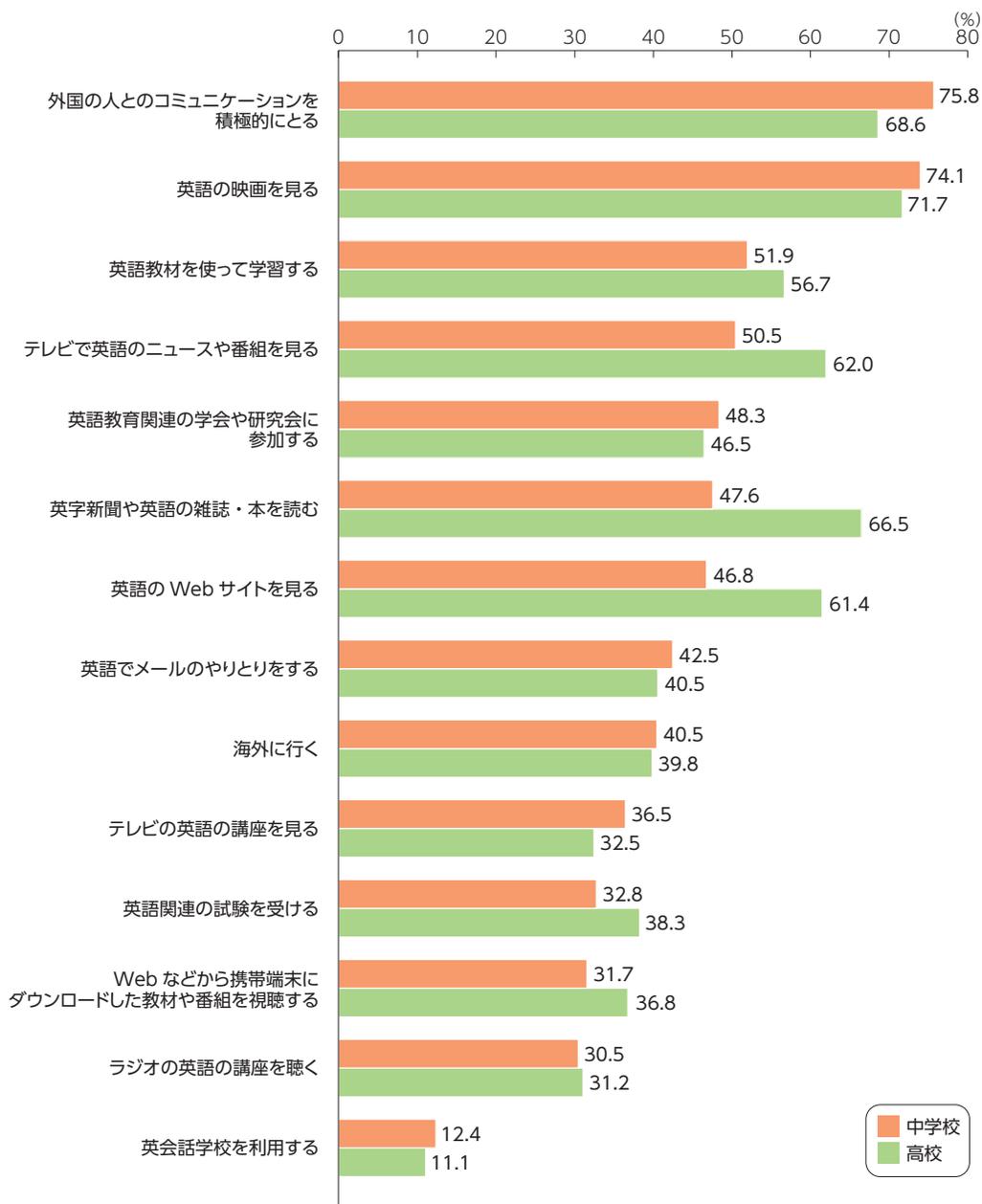
\* 複数回答。

## 教員の自己研鑽は、「外国の人とのコミュニケーションを積極的にとる」「英語の映画を見る」が7割前後で高い。

中高ともに7割前後の教員が、自己研鑽として「外国の人とのコミュニケーションを積極的にとる」「英語の映画を見る」を行っている。高校の教員には、「英字新聞や英語の雑誌・本を読む」「テレビで英語のニュースや番組を見る」「英語のWebサイトを見る」も多い。

**Q** 英語力の向上または維持のために、自己研鑽として行っていることがありますか。

図2-3 自己研鑽



\*「とてもそう」+「まあそう」の%。

## 2. 指導に関する教員の意識

### 授業で大切にしていることは、中学校は「楽しさ」、高校は「理解」。

英語教員が授業で大切にしていることは、中学校は「楽しさ」、高校は「理解」がもっとも高かった。順位は異なるが20項目中上位9項目は中高ですべて同じ項目だった。



生徒に対して、あなたが授業で大切にしていることをあらかず言葉として近いものを3つまで選んでください。

図2-4 授業で大切にしていること

(%)

	中学校	高校
①	楽しさ (51.9)	理解 (41.9)
②	定着 (34.5)	楽しさ (38.1)
③	理解 (31.5)	好奇心 (32.5)
④	自信 (28.6)	定着 (30.9)
⑤	好奇心 (27.1)	自信 (25.1)
⑥	協働 (18.9)	協働 (16.0)
⑦	挑戦 (16.5)	発見 (15.4)
⑧	訓練 (13.5)	挑戦 (14.1)
⑨	発見 (11.8)	訓練 (13.8)
⑩	仲間 (9.1)	納得 (13.3)
⑪	居場所 (8.0)	自律 (9.6)
⑫	納得 (7.6)	探究 (8.9)
⑬	共感 (6.3)	共感 (8.2)
⑭	自律 (5.7)	蓄積 (6.7)
⑮	驚き (5.6)	居場所 (5.8)
⑯	蓄積 (5.4)	驚き (4.7)
⑰	未来 (4.3)	未来 (3.6)
⑱	探究 (4.1)	仲間 (3.2)
⑲	創造 (3.4)	創造 (3.1)
⑳	その他 (1.6)	その他 (1.2)

\* 20項目中3つまで選択。

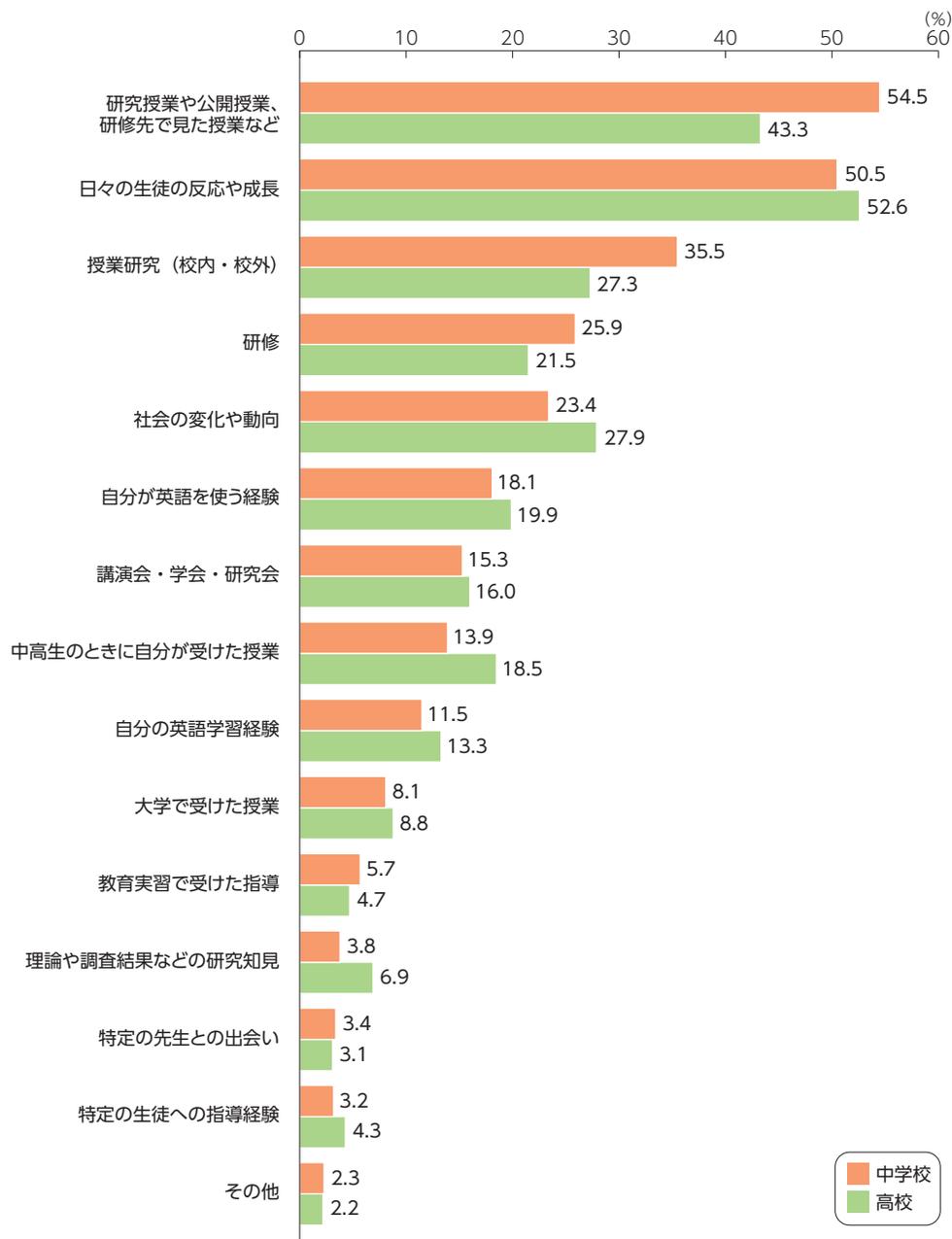
## 指導に影響を与えているものは、さまざまな研究授業や「日々の生徒の反応や成長」が高い。

指導に影響を与えているものは、具体的な授業を見て研究することや、生徒の反応や成長などである。一方で、「大学で受けた授業」や「教育実習で受けた指導」などは低い。



英語の指導をするにあたって、特に影響を与えているものを3つまで選んでください。

図2-5 指導に影響を与えているもの



\* 15項目中3つまで選択。

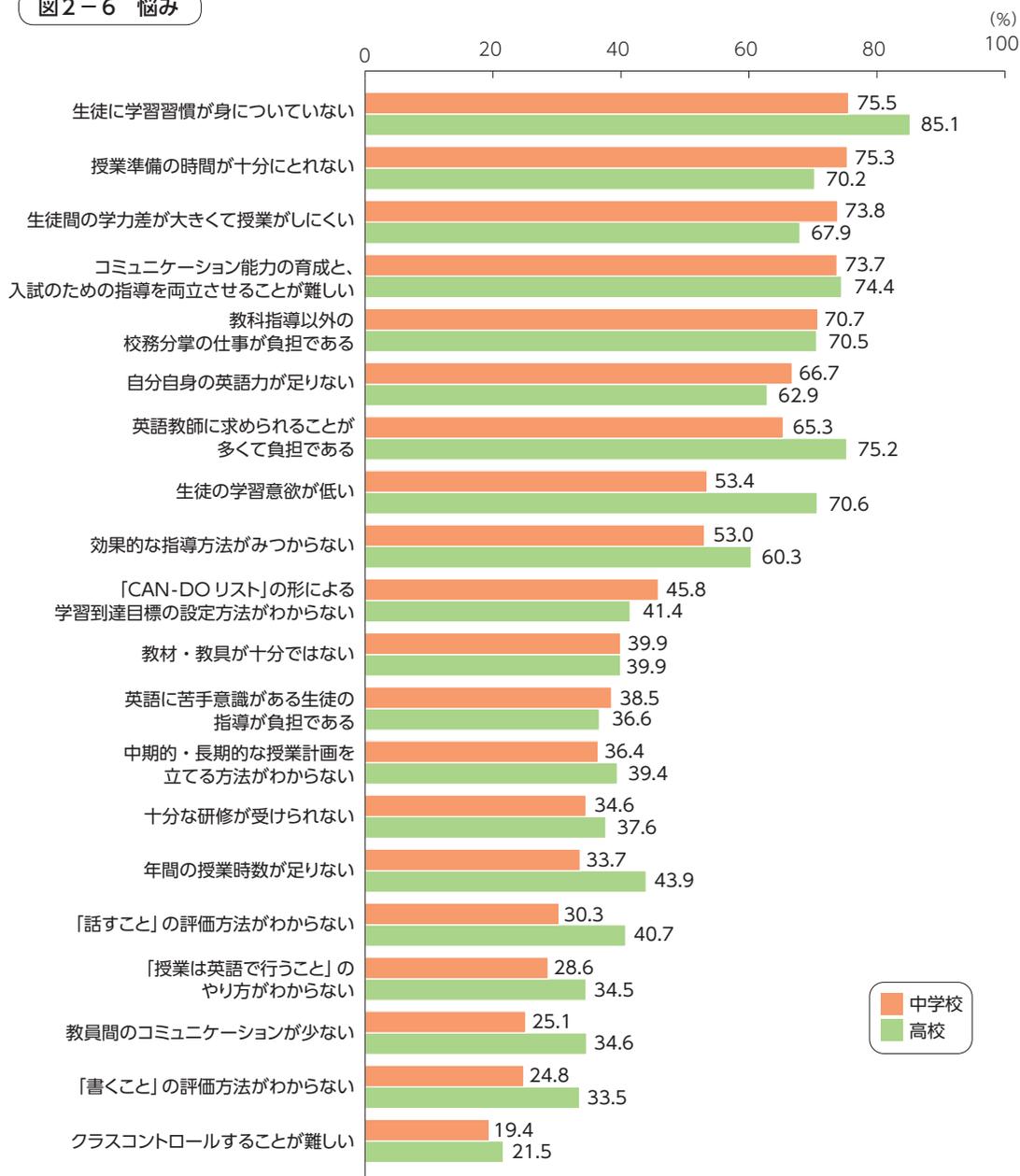
## 2. 指導に関する教員の意識

教員は、入試対応、自分自身の英語力の不足、指導方法など多くの悩みを抱えている。

悩みの上位には、英語だけではなくどの教科にも共通することがあがっているが、英語に特有な項目で見ると、中学校では、「コミュニケーション能力の育成と、入試のための指導を両立させることが難しい」、高校では、「英語教師に求められることが多くて負担である」「効果的な指導方法が見つからない」などが上位にあがっている。

Q 次のような悩みをどれくらい感じていますか。

図2-6 悩み



\*「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

## 生徒の将来の英語使用イメージについて、中学校の2割以上、高校の3割以上の教員は「使わない」と回答。

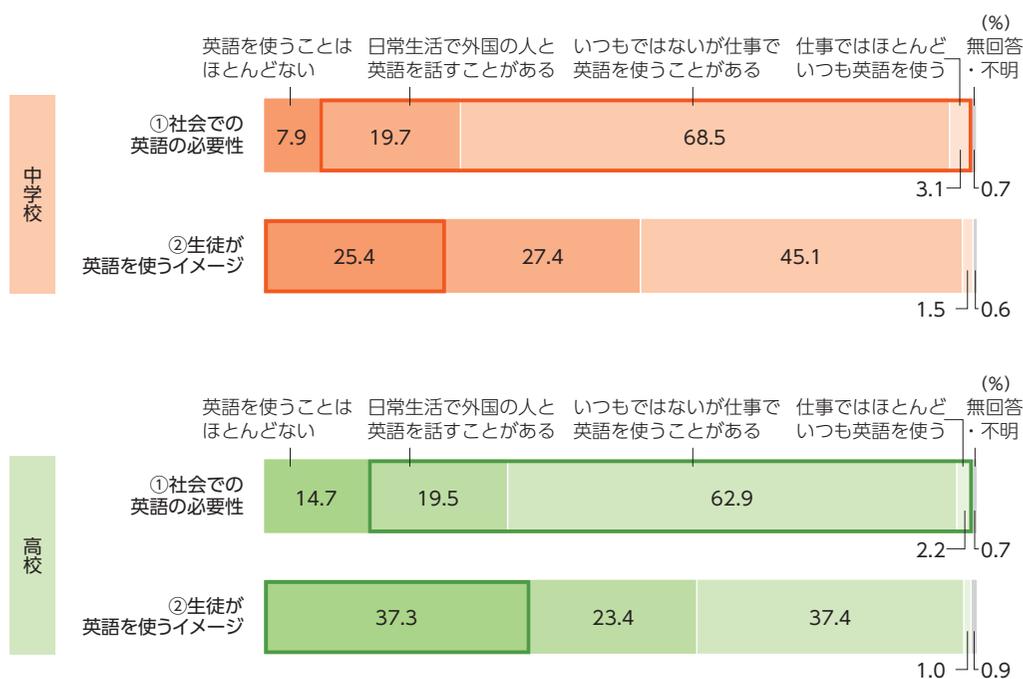
中高教員の約9割が教えている生徒の将来の英語の必要性を感じている。しかし、実際の英語使用イメージについては、中学校の2割以上、高校の3割以上の教員が「英語を使うことはほとんどない」と回答。一方で、「いつもではないが仕事で英語を使うことがある」と回答した教員も中学校で4割以上、高校で3割以上いた。

Q

教えている生徒が大人になったとき、

- ①社会ではどれくらい英語を使う必要がある世の中になっていると思いますか。
- ②生徒自身はどれくらい英語を使っていると思いますか。

図2-7 社会での英語の必要性と生徒が英語を使うイメージ



### 3. 英語教育改革について

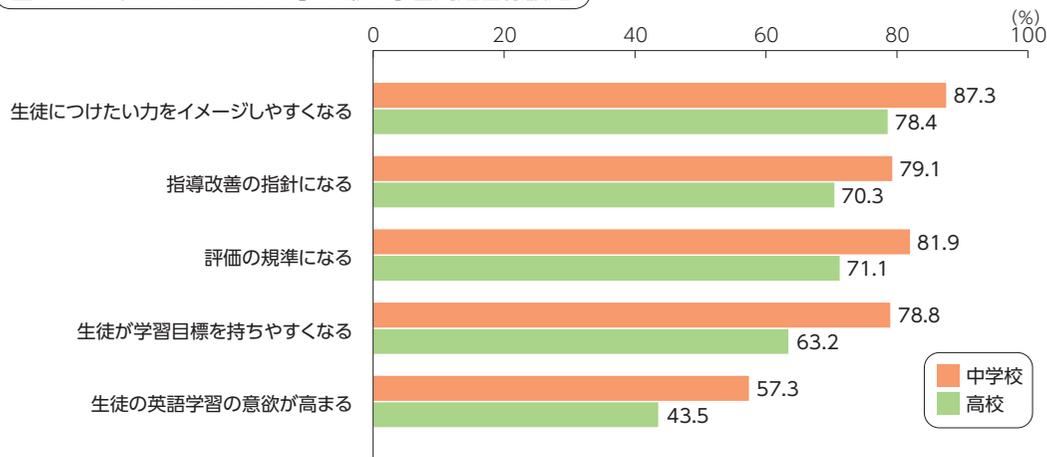
#### 「CAN-DOリスト」の形の学習到達目標設定の意義は理解されている。

「CAN-DOリスト」の形の学習到達目標の役立ちは、「CAN-DOリスト」の設定がすでに実行されている高校よりも、中学校の方が感じている。



「CAN-DOリスト」の形の学習到達目標を設定することは、どのようなことに役立つと思いますか。

図3-1 「CAN-DOリスト」の形の学習到達目標設定



\*「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

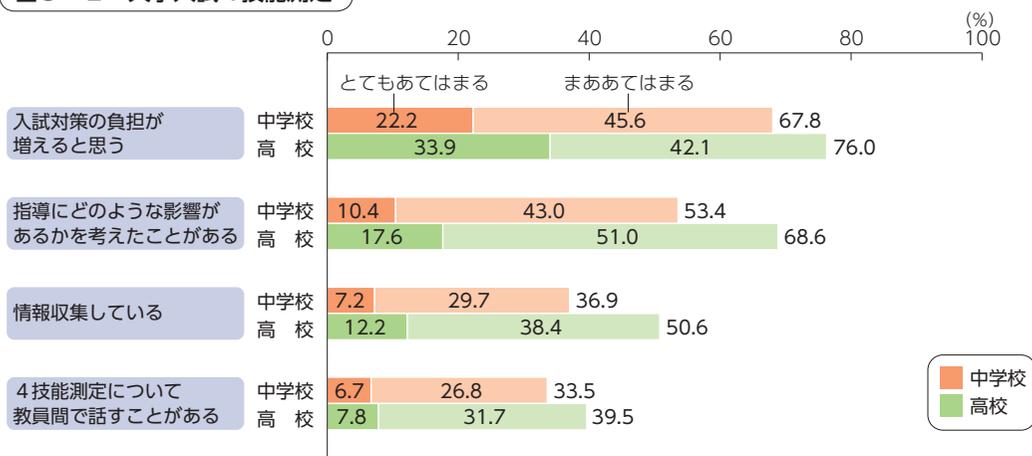
#### 大学入試4技能測定に対して、中高ともに7割前後が「負担が増える」と回答。

大学入試4技能測定については、入試対策の負担が増えるという意見がもっとも多かった。いずれの項目も大学入試が身近である高校の方が数値が高かった。



大学入試を4技能で測定することについて検討されていますが、次のようなことはあてはまりますか。

図3-2 大学入試4技能測定



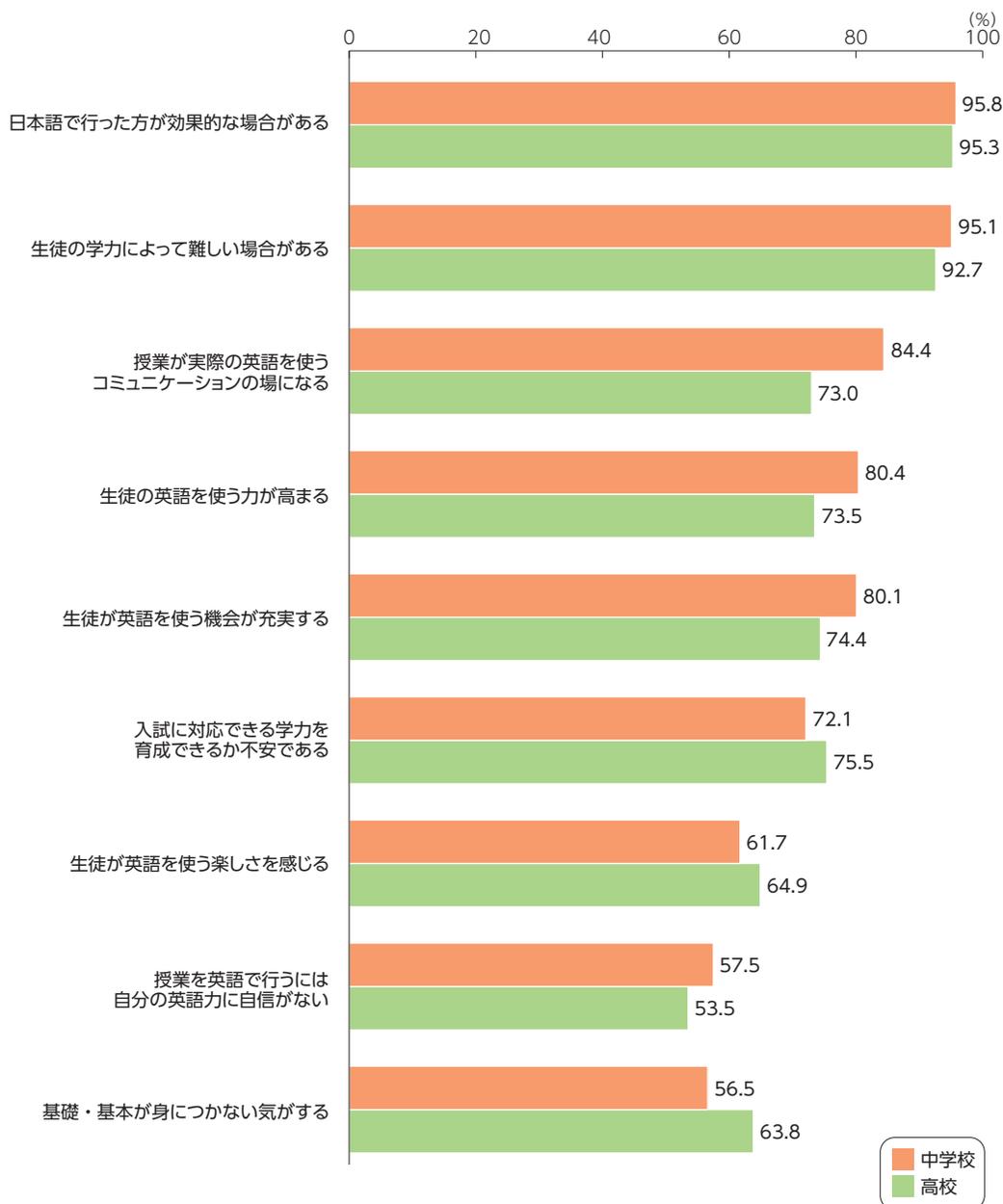
\*各棒の外側にある数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

## 「授業は英語で行うことを基本とする」ことについて、その考えやねらいを肯定的に捉えている教員が多い。

「授業は英語で行うことを基本とする」ことによって、「授業が実際の英語を使うコミュニケーションの場になる」「生徒の英語を使う力が高まる」「生徒が英語を使う機会が充実する」と肯定的に捉えている教員が多い。一方で、難しさや不安を感じている様子も見取れる。

**Q** 「授業は英語で行うことを基本とする」ことについてどのように感じますか。

図3-3 「授業は英語で行うことを基本とする」ことについて



\*「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

## 4. 英語教育改革に関する意見(校長調査)

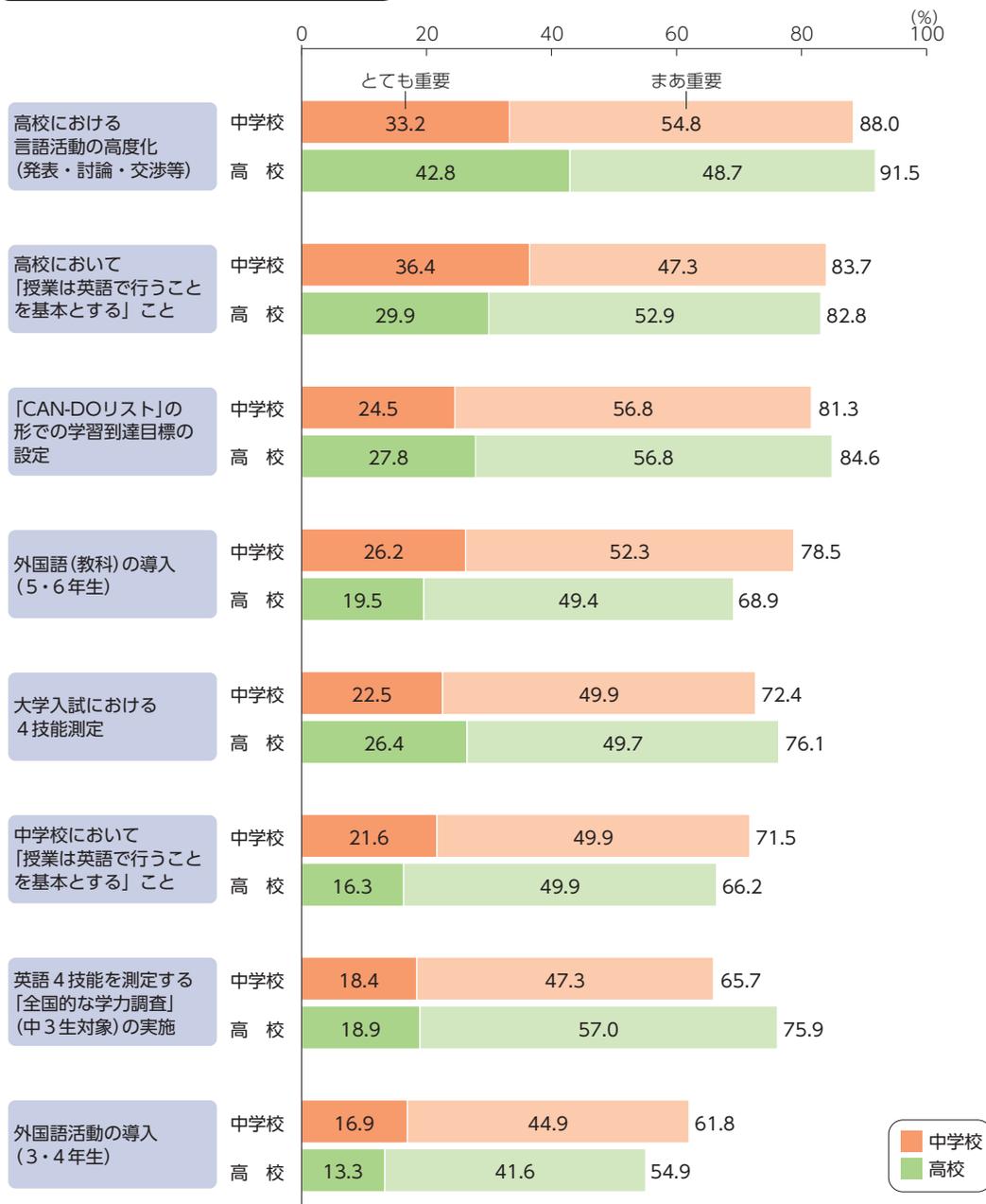
### 英語教育改革については「重要」だと回答。

進められている英語教育改革について、校長は多くの項目で「重要(とても+まあ)」と回答している。「外国語(教科)の導入(5・6年生)」は中学校の校長が、「英語4技能を測定する『全国的な学力調査』(中3生対象)の実施」については高校の校長が、「重要」とする回答が多かった。



現在、国が進めている(進めようとしている)英語教育改革について、それぞれどれくらい重要だと思いますか。

図4-1 英語教育改革に関する意見



\*各横棒の外側にある数値は「とても重要」+「まあ重要」の%。

本調査(「中高の英語指導に関する実態調査2015」)の設計は、2014年に行った「中高生の英語学習に関する実態調査2014」と「英語教員に対する聞き取り調査」の分析より明らかになった生徒の英語学習実態や意識、教員の英語指導実態や意識に基づいて行った。ここでは、「英語教員に対する聞き取り調査」の分析結果として英語の指導に大切な5つのキーワードとその意味を紹介する。聞き取り調査は、文部科学省「新学習指導要領に対応した授業実践事例映像資料」で英語による授業実践を行っている教員6名(中学校教員3名、高校教員3名)を対象に行った。それを質的研究法であるThinking at the Edge (TAE)にて分析した結果である。

## 【分析で抽出された5つのキーワードとその意味】

### ●子どもに寄り添う

生徒の学習状況、発達や興味・関心に寄り添うことに加え、学校と日々の生活の中で起こる中高生の思春期独特の繊細な感情の揺れ、いらだち、そういうものにも深い愛情を持って寄り添っている。

### ●自らの成長

自らの英語力を伸ばすために自己研鑽している。また、指導や授業運営の研究・実践・振り返りを行い、その繰り返しの中で、自らの教育観や指導観も発展・進化させている。

### ●英語を使う経験

完全ではなくても伝えたいことを伝えようとした経験がある。英語を使って人とつながることのすばらしさや喜びを自ら体験したことがある。それらを生徒に伝えたい、経験してもらいたいと思っている。単に留学をしたり、海外で生活をしたことがあるという意味ではない。

### ●最善を求め続ける

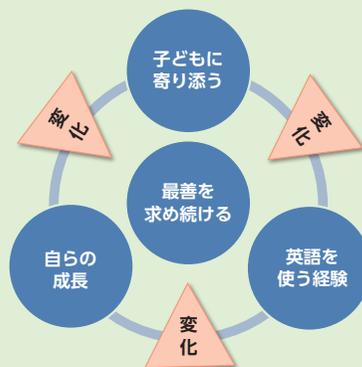
「子どもに寄り添う」こと、「自らの成長」「英語を使う経験」のすべてに常に最善を尽くし、それを続けている。1つの活動、1つの授業に最善を尽くすとともに、10年、15年後の先を見越して何をすべきかも考えている。

### ●変化

生徒の日々の小さな変化に心を配るとともに、日本や海外で起こっていること、教育行政の動きなどにも敏感である。いろんな学校で異なる経験をしたり、学びを求めて新しいことに挑戦することで、多様な価値観に触れながら、それらを寛容に受け入れ、自らも変容・成長し続けている。

## 【5つのキーワードの関係をイメージ化したもの】

5つのキーワードの持つ意味や重さ、相互の関係、「変化」の影響を受けたタイミングは、教員ごとに異なるが、イメージはこの1つに表すことができる。中心になるのは「最善を求め続ける」ことである。「子どもに寄り添う」「自らの成長」「英語を使う経験」のそれぞれに最善を求め続けている。「変化」の影響を受けながら、「子どもに寄り添う」「自らの成長」「英語を使う経験」のそれぞれを関連・循環させることで、自ら変容・成長し、日々の授業づくりに臨んでいる教員の姿が見える。



特別インタビュー

## 「調査結果から読み取れる課題とこれからの英語指導のあり方」

東京外国語大学大学院教授 根岸 雅史

調査結果から読み取れる課題を基に、今後、英語教育の現場ではどのような指導の改善を図っていけばよいのでしょうか。「中高英語教育研究会」の研究リーダーとして調査にかかわられた東京外国語大学大学院の根岸雅史教授に指導のヒントをうかがいました。

### 【指導方法】

#### 言語活動の充実が依然として課題

今回の調査結果からは、昨今の英語教育改革を踏まえ、教員の指導観や授業観が大きく変化しているのが見て取れました。同時に、現状のさまざまな課題も浮かび上がり、これからの英語指導のあり方を考えさせられました。

中高における英語の授業のあり方は、明らかに変わりつつあります。例えば、従来型の授業には、文法を学び、訳読を繰り返すといったイメージがあると思いますが、今回の調査結果では、「教科書本文の和訳」の実施率は中高ともに7割弱にとどまっていました。一方で、「音読」「発音練習」は、ほぼすべての教員が取り入れていることがわかりました。従来から音読や発音練習は行われていましたが、今回の調査でこれほど高い数字として表れたのは、音声面をより重視する指導の表れといえるでしょう。

大きな課題は、言語活動を実践する教員が限られていることです。特に、中学校に比べ、高校は言語活動の実施率が一段低い状況でした。高校では大学入試対策を重視して指導していることが、その一因と考えられます。ただ、高校入試でもスピーキングは出題されていないにもかかわらず、中学校では「英語での会話(生徒同士)」「スピーチ・プレゼンテーション」などの「話すこと」の言語活動が高校よりも行われています。そこには、中高の教員間に意識の差があるはずですが、もちろん、入試のためだけに英語学習をするわけではありませんが、昨今議論されている大学入試改革の方向性を踏まえても、今後は高校でも言語活動をいっそう充実させる必要があるのは明らかです。

### 【言語活動と教員の意識】

#### 間違いをさせることも、重要な学習プロセス

教員自身、言語活動の必要性をよく理解しているものの、十分に実行できずに悩んでいることが調査結果から読み取れます。例えば、「生徒が自分の考えを英語で表現する機会を作る」「4技能のバランスを考慮して指導する」などは、「重要だと思う」と答える教員が多い反面、「十分実行している」という回答は少なく、意識と行動が乖離しています。多くの教員が重要だと思っているにもかかわらず、実行できないのはなぜでしょうか。

言語活動の中でも、「英語での会話(生徒同士)」や「スピーチ・プレゼンテーション」に比べて、「ディスカッション」や

「ディベート」の実施率はかなり低くなっています。これらの活動の大きな違いは、「予測可能かどうか」です。生徒同士の英語での会話は、教科書の例文に沿ってやりとりする場面が想定されますし、スピーチ・プレゼンテーションは授業内容を踏まえて準備したことを発表する活動がほとんどでしょう。こうした言語活動は、教員の想定を超えた展開になることはまずありません。

一方、ディスカッションやディベートは、基本的に予測不能な言語活動です。あらかじめ例文を用意しておき、ディスカッションやディベートをしても意味はありません。そのため、教員は準備し切れない、というより、準備しようがない部分が大きく、指導への不安をめぐい去れないため、授業でディスカッションやディベートをしないのではないのでしょうか。

しかし、英語学習において、間違いが重要なプロセスであることは、生徒だけではなく、教員にもいえます。会話が予測しない方向に進み、教員が対応し切れなかったり、ミスしたりしても問題はないのです。生徒の興味に沿って話が進み、内容が理解できなくなったら、「先生はこのトピックは分からないよ」と、正直に言ってよいと思います。教員にとっても、間違いや知らないことを知ることは授業改善への第一歩となるのです。

#### 生徒の英語力にかかわらず、言語活動は実施可能

言語活動を難しく捉えている教員も少なくないようです。ディスカッションのテーマは、社会問題など知的なものでもなくともかまいません。スポーツや芸能など、生徒にとって身近なトピックは格好のテーマですし、「今日の昼食は何にするか」でもよいのです。そう捉えると、ディスカッションといっても大掛かりな言語活動である必要はなく、授業のイントロダクションに適した気軽な活動に感じられるのではないのでしょうか。身近なテーマから始めて、自分の考えを英語で言うことに十分に慣れてから、社会問題などにつ



シンポジウムでの根岸先生

いて本格的に議論すればよいのです。

「生徒の英語力が足りないから、言語活動ができない」という声も聞かれますが、本当にそうでしょうか。英語力を高めることが先決と考え、単語や文法の反復練習ばかりしていたら、生徒はますます意欲を失いかねません。それよりも、身近なトピックで会話するサポートをしたほうが英語力につながる場合が多いですし、生徒自身が「もっと話せるようになりたい」と感じたら自ずと学習に向かうでしょう。英語の授業は、「楽しい雑談の時間」と思えるくらいがちょうどよいかもしれません。生徒に「間違ってもよいのだ」と感じられる雰囲気があれば、英語力のレベルにかかわらず、言語活動はできるとお考えください。

### 【自己研鑽】

#### 教員自身が英語の言語活動を体験してほしい

教員自身も間違えてよいという話をしましたが、もちろん、わからないまま立ち止まってよいわけではありません。自己研鑽を通して、英語力や指導力を高める努力を続けましょう。

今回の調査でも、教員が多様な自己研鑽に取り組む姿が明らかになっています。英語教員として言語そのものに関心を持って高めていく姿勢は欠かせませんが、他方では英語を使い、自分の興味に沿って楽しむ体験をしてほしいと思います。映画、スポーツ、歴史、ファッションなど、対象は何でもかまいません。なぜそうした体験が必要かという、自分の興味や関心のために英語を使って調べたり考えたり、コミュニケーションを取ったりといった活動は、言語活動にほかならないからです。教員自身が英語を使用する経験を十分にすることで、言語活動への感覚が養われ、たとえば、オーセンティックなタスク作りや、コミュニケーション的なテスト作りなどをしやすくなるのです。

### 【教員の英語使用】

#### 英語で伝えるという観点で、授業の構成は発問を見直す

授業で教員が英語を使用する割合が年々上昇していることは良い変化ですが、英語を使用する場面を見ていくと、今後の課題が浮かび上がってきました。

中高ともに「生徒への指示」「褒め・励まし」などが上位に入っていますが、これらは授業中での英語使用のスタートに過ぎません。次の段階として、「本文の内容を紹介・説明(オーラルイントロダクションやパラフレーズ)」「言語活動の説明(活動のモデル提示も含む)」といった場面で英語を使うことを目指してほしいと思います。言語活動の場面では、生徒と一緒に活動すれば教員も英語を使うのは自然な流れとなります。

英語での説明が難しいと感じられるのは、日本語で説明していたことを、単に英語に置き換えようとしていることが原因かもしれません。日本語で言っていた内容を英訳して言おうとせず、生徒が英語を使う言語活動をたくさん行うという観点で見直し、いかに授業を変えていくかを考えるようにしてください。

### 【CAN-DOリスト】

#### 生徒の実態に沿ったCAN-DOリストの設定を

「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の設定については、中高ともに理解が進んでいると感じられました。ただし、CAN-DOリストを適切に設定して運用するのは難しく、理想と実態のギャップが大きいケースが多いことに注意が必要です。

CAN-DOリストが十分に機能していないケースでよく見られるのは、CAN-DOリストが授業の内容を列挙した「TO-DOリスト」となっている場合です。これでは短期目標の繰り返しに過ぎず、CAN-DOリストの本来の目的である長期的な学習イメージが持てません。

また、授業内容と結び付いていない、大まかな力を設定しているだけのCAN-DOリストも見られます。高校卒業時の「読むこと」の目標を「英字新聞が読める」と設定しているのに、3年間の授業で英字新聞を読む活動を一度も行っていないといったケースです。

CAN-DOリストを設定する上での最初の一步は、生徒の実態を知ることです。まず前年のリストから1項目でよいので、目標到達の度合いを確かめてみてください。教科書の内容に沿って設定していても、生徒全員が100%理解していることはありませんから、「教科書の内容」イコール「生徒に付く力」ではありません。1項目の実態を知れば、他の項目の見直しが必要かどうかも自ずと見えるでしょう。

### 【同僚性】

#### 同僚との気軽な会話の中から解決策が見えることも

調査結果から、英語教員の多忙感や負担感が大きいことも明らかになりました。昔に比べて、教員同士が語り合う機会が減ったといわれています。そこで、英語教員が集まって話をするなど、同僚性を大切にすることで、少しでも気持ちに余裕を持てるようにしてはいかがでしょうか。

堅苦しいミーティングではなく、昼食やお茶をいただきながら気楽に話せる雰囲気をつくれれば、日頃の気持ちや悩みを率直に語り合えるかもしれません。その中で、ある教員が「言語活動をどう取り入れるべきか迷っている」と悩みを打ち明けたら、「それなら一緒にやってみようか」といった流れになることもきっとあるでしょう。

基本的には他教科も同じですが、特に、英語教員は、生涯にわたり成長し続けることが求められると思います。そのことを苦勞と捉えず、むしろ喜びとして学び続け、英語力や指導力を高めていってほしいと思います。そのためにも、先ほども触れたように、まずは、英語を自分のために使う経験をたくさんし、それを資産として授業やテストを考えることにつなげ、その経験を生徒に還元してください。教員経験年数を重ねるほど、教えることがますます面白くなるのが英語という教科の特性だと、私は思うのです。

\*写真は「上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム2015」の際のもです。

## 調査企画・分析メンバーによる調査結果の考察とメッセージ

信州大学教授 酒井 英樹

本調査では、指導で「重要だと思うこと」と「十分実行していること」の差を見ることができません。その中で、教師は、「生徒が自分の考えを英語で表現する機会を作る」ことが「とても重要」だと思いつつも、その機会を十分には作れていない実態があることがわかりました。しかし、すでに中学校で7割、高校で5割の先生が授業で行っている「教師によるsmall talk（英語による簡単な話）」なども生徒の「話す力」を伸ばす機会とすることができます。「small talk」の中では、日常的に生徒に英語で声をかけ、生徒との英語によるコミュニケーションの場をつくり、身近なところから生徒が英語を話す機会を作っていくことができます。先生自身も話す内容を考え、色々な表現を使ったりして生徒に見せていくということも大事なんだと思います。「スピーキング」というと、ディスカッションやディベートのようにレベルの高いものをできるようにすることを想定しがちですが、まず最初は英語で話すコミュニケーションの場を作って、短いところから話す機会を作る、そういうことが大切だと思います。

青山学院大学准教授 高木亜希子

昨年度行った「英語教員に対する聞き取り調査」（2014）※から導き出した5つのキーワード（「子どもに寄り添う」「自らの成長」「最善を求め続ける」「英語を使う経験」「変化」と、本調査で明らかにした「指導に影響を与えているもの」の上位に挙がっている項目はとても関連があります。しかし、その中でも「英語を使う経験」が指導に影響を与えている割合は2割弱という低い結果でした。将来、英語を使うイメージを生徒自身が持っていない現状とあわせて考えると、教師自身ももっとオーセンティックな「英語を使う経験」をし、その中で感じた思いなどを生徒に伝え、生徒自身が英語を使うイメージや話す活動への意欲を持つことにつながる必要があると考えられます。また、本調査では「授業の振り返り」についても調べています。振り返りを深めるためには、コルトハーゲン(2010)が挙げている、「思考」「感情」「望み」「行動」という4つの視点が重要だと考えられます。「振り返りなくして成長なし」と教師教育学では考えられていますが、「振り返り」は教師の成長、変容のために非常に重要なキーワードだと思います。

※分析結果は、本ダイジェスト版の19ページをご参照ください。



シンポジウムでの酒井先生



シンポジウムでの高木先生



シンポジウムでの重松先生



シンポジウムでの工藤先生

## 国分寺市立第二中学校校長 重松 靖

本調査結果から、教員が「授業で大切にしていること」として、中高ともに「楽しさ」が上位に挙がりました。これは、私も一番大事にしてきたことです。ただ、何のためにこの活動をしているのかという目的と合致した楽しさでなければいけないと思います。「現在進行形」を学ぶために、ジェスチャーゲームを盛り込んだ授業を見る機会がありました。生徒はジェスチャーを使って活発に活動し、授業を楽しんでいる様子でした。しかし、英語のインプットや生徒の発話は十分ではありませんでした。教師は、楽しいだけでなく、どうやって英語の力を高めるのか、いかに英語のインプットを増やし、アウトプットを豊かに行えるように導くのかということを考え工夫していかなければいけないと思います。また、英語の教員は、授業の中でただ単に知識を教えるだけでなく、英語を使ったらどんな世界が広がるのか、どんなやりがいがあるのかということも積極的に発信していくべきだと思います。そのことが、生徒が将来、英語を使って仕事をしたい、海外で働きたい、といった英語を使うイメージを持つことにもつながっていくのではないかと考えます。

## 玉川大学准教授 工藤 洋路

今回の調査結果から、授業でさまざまな活動が行われていることがわかりました。授業での活動は、予習や復習などの生徒自身の学習に反映されていくと考えられますが、中高生を対象とした調査※から、生徒が英語の授業のためにやっている勉強（予習・復習を含む）とCAN-DOディスクリプタによる生徒の自己評価（英語力）との関係を調べてみました。自己評価により上位群と下位群とに分けると、中高すべての学年で、下位群より上位群の方が、「自分の気持ちや考えを英語で書く」「自分の気持ちや考えを英語で話す」といったことを行っていました。また、「教科書本文を和訳する」「問題を解く」「英語の歌を聴いたり、歌ったりする」「英語音声の映画やテレビ番組を見る」といったことも下位群よりも行っています。つまり、上位群は、発展的な活動だけではなく、「和訳」なども含めてさまざまなことを行っていることがわかりました。生徒の英語力を上げるためには、生徒がさまざまな活動を体験し、その中で「自分の気持ちや考えを英語で書く」「自分の気持ちや考えを英語で話す」といった発展的なこともできるようにしていくことが大事なのだと思います。

※「中高生の英語学習に関する実態調査2014」

\* 2015年12月に開催した「上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム2015 『話すこと』の指導と評価をどう始めるか?」-「中高の英語指導に関する実態調査2015」と実践事例から考える4技能時代の英語教育-」で、調査結果に関連して発表されたものを再編集したものです。

\* 写真は「上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム2015」の際のものです。

## 中高の英語指導に関する実態調査 2015

### 調査企画・分析メンバー

根岸 雅史	(東京外国語大学大学院教授)
酒井 英樹	(信州大学教授)
高木 亜希子	(青山学院大学准教授)
重松 靖	(国分寺市立第二中学校校長)
工藤 洋路	(玉川大学准教授)
木村 治生	(ベネッセ教育総合研究所副所長 東京大学客員准教授)
加藤 由美子	(ベネッセ教育総合研究所 グローバル教育研究室長)
福本 優美子	(ベネッセ教育総合研究所 グローバル教育研究室研究員)

※所属・肩書は、調査企画・分析時のものです。

ベネッセ教育総合研究所グローバル教育研究室で  
実施している各調査の結果は、  
すべて以下の WEB サイトで閲覧できます。

<http://berd.benesse.jp/global/>

こちらのサイトは **ベネッセ グローバル教育研究室** **検索** で検索できます。

※ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでは、ベネッセ教育総合研究所で実施している各種調査の結果もご覧いただけます。

#### ● お問い合わせ先 ●

本調査に関するご意見・ご感想・お問い合わせは、下記までお願いいたします。

(株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

「中高の英語指導に関する実態調査」係

TEL:042-311-3390 (10:00～17:00 / 土日・祝日を除く)

#### 「中高の英語指導に関する実態調査2015」ダイジェスト版

発行日：2016年3月14日 発行人：谷山和成 編集人：木村治生

発行所：(株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所  
〒206-0033 東京都多摩市落合1-34

編集協力：(株)ジー・アンド・ピー 執筆協力：二宮良太  
15EE04

©Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。